

発達障害のある児童を対象としたイベント企画・体験型キャリア教育プログラムの開発

宮本 昌子 (筑波大学 人間系 准教授)

【問題の背景と研究の目的】

発達障害のある者が就労後に抱えやすい問題点は人間関係面に表れやすいと言われる。「職場での暗黙のルールが分からない」「職場の人コミュニケーションがとれない」などの問題点が指摘されるが(梅永, 2011), このような問題は就労段階直前からの教育では既に問題解決が困難であり、幼少期からの継続的な支援が必要である。筆者らが実践してきたキャリア教育プログラム, 通称「カフェプログラム」は, 参加者が将来職業につくこと, あるいは働くことを意識し, 参加者が自分たちの年齢段階で出来る, 「働く体験」を提供するものである。その題材として, 1日, カフェをオープンしコーヒーを作ること, 販売の接客をする体験することを考案した。キャリア教育を教育段階で限定せず, 幼少期から始まり生涯続くものと捉え, 小学生の段階から, 働くことを体験し, 職業について考える機会を与えることに意義があると考えた。そこで, 本研究では従来の中学生・高校生の参加者に, 小学生を加えることとし, プログラムの適用可能性や, 事前・事後の評価結果等について検討することを目的とした。

【方法】

- ① 対象：発達障害, 軽度知的障害のある小学校3~5年生の男児4名を対象とした。毎年参加している4年目の高校生5名もプログラムの参加対象となり, 上記4名と一緒に活動を行った。
- ② プログラムの目標：大学の学園祭で, 1日「カフェ」を開くことを目標に, 店員の業務について学ぶ。業務は大きくコーヒー作りの作業面と接客の対人面に分けられ, いずれの仕事も体験できるように, 本番に備えて練習する。練習した知識やスキルを本番のカフェで実際の客を前に発揮することが最も重要な目標である。「カフェ」という一つのイベントを仲間と共に成し遂げたという達成感や自信が職業への関心につながることもねらいである。
- ③ 効果の検討：プログラム事前・事後の評価, 練習場面でのコミュニケーションと態度の評価, 練習場面と本番場面のVTRを視聴による評価を行った。

【結果と考察】

4名全員が事前と比較し, 事後の評価得点が上昇した(特に上昇が顕著であったA児・D児の詳細は図1・2参照のこと)。本プログラムに参加していない, 発達障害のある8名の群との比較では, 事前・事後の得点の増加がプログラム参加群の方が高い傾向がみられた。また, 練習場面での評価では, 対象児の自己評価の得点が徐々に上昇する傾向がみられた。VTRによる第三者の評価により, 各児童が達成できた点とできなかった点が明らかにされ, 全ての作業を行うことが出来なくても, 得意な仕事を担当するという方法で, 小学生の本プログラムへの参加がキャリア教育として意義のあるものになり得ることが示唆された。

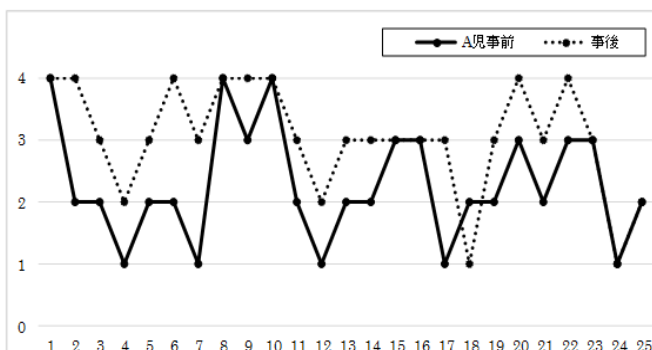


図1 A児の事前・事後の評価結果(保護者による)

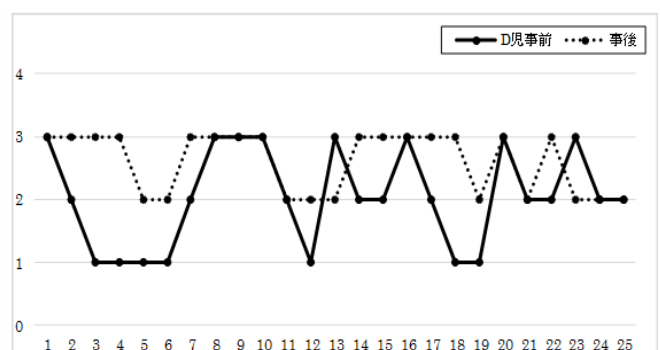


図2 D児の事前・事後の評価結果(保護者による)

(縦軸は得点, 横軸は評価用紙質問項目番号を示す。)

【今後の課題】

今回用いた事前・事後の評価ツールの信頼性・妥当性についての検討が必要である。そのために, より多くの対象にプログラムの実施と効果の検討を行うことが望まれる。HP上で本プログラムのマニュアル, 評価ツールを公開し, プログラムの有効性についての議論を深めたいと考える。